タジキスタン国際水会議参加報告

齋藤　竜太

1. はじめに――参加のきっかけ

筆者は2013年の8月16日から9月24日にかけて中央アジアに滞在し、カザフスタン、タジキスタン、クルグズスタン、ウズベキスタンを訪問した。この滞在の目的は、第15回秋野豊賞の助成に基づく現地調査であり、主な調査地はウズベキスタン、調査内容は、ウズベキスタンの農村における水資源管理組織「水消費者組合（WCA）」の調査であった。

6月末に秋野豊賞受賞の報せが届き、中央アジア渡航の計画を大学院の同期であるタジキスタン人の留学生に話したところ、「8月にドシャンベで開催される国際水会議に興味はないか」と言われたのが、今回の「水協力国際ハイレベル会議（High-level International Conference on water cooperation、以下、国際水会議）」参加のきっかけであった。中央アジアの水資源問題について研究してきた筆者は、これまでは中央アジア地域内で河川の下流域にあたるウズベキスタンに焦点を当てていた（中央アジアにおける、水資源をめぐる国家間対立については後述する）。下流国のウズベキスタンが、ダムで水量を制限し下流域に被害をもたらしているとして非難している上流国のタジキスタンで開催される、水資源に関する会議というのは、いったいどのようなものになるのか、参加するのはどのような団体で、そこではどのような議論が交わされるのか、興味があった。

この国際水会議は、タジキスタン政府と国際連合の共催である。2010年に国連総会で、2013年を「世界水の年」にすることが決定されたこと、また、2012年に、同じく国連総会が、2013年に向けて、あらゆるレベルの利害関係者が水の効率的な利用のためにあらゆるレベルで対策をとっていくことを促進していくことが可決されたことなどをうけ、開催が決定された。各国政府に加え、国連開発計画（UNDP）などの国連関係の国際機関も参加した。

話を聞いた当初は正直、一介の大学院生がこのような大規模な国際会議に参加できるのか、不安があった。聞けば、参加国によっては首脳が出席するらしい。参加経験者にも相談しつつ、参加を申し込んでみたところ、思っていた以上に順調に参加が決まった。以下、日本国

内からの参加申し込みから、カザフスタンを経由してタジキスタンに入り、会議参加を経て出国するまでについて記述する。

2. 日本国内からの参加申し込み

参加にあたっては、国際水会議の HP から、必要事項を記入した申込書をダウンロードし、そのデータを会議事務局にメール添付して提出した。申込書の記入内容には、住所氏名連絡先および旅券番号、所属機関とそこでの肩書（筆者は Graduate Student, TA と記入）、どの部会に参加するか、ビザ支援は必要か、などの項目があった。Delegation, Country という項目もあり、筆者は Head of the Delegation と Personal に自分の氏名を記入し、Attendant は None と記入した。なお、申込書には Publications の欄もあった。

7 月 16 日にメールで提出し、その翌日に、国際水会議事務局から、「申込書を受理しました。公式な派遣団であれば、宿泊施設を提供いたします（つまり筆者には提供されない）」という旨のメールが届いた。なお、ビザ支援については、申請はしたものの、筆者は確認する前に自分で在京タジキスタン大使館を訪れて観光ビザを取得してしまったため、会議事務局からの支援の効果については不明である。

その後も会議事務局からは、8 月 9 日にはビザ支援に関する確認、8 月 14 日にはタジキスタンへの到着と出国日および宿泊施設の確認のメールが届いた。筆者は往路：成田―仁川―カザフスタン・アルマトィ、復路：ウズベキスタン・タシケント―仁川―成田のルート（アシアナ航空）で中央アジア入りする予定を立てていたので、アルマトィからドシャンベに入るカザフスタンのエアアスタナ航空便を、エアアスタナ社の HP 上で予約し、E チケットを取得した。なお、国際水会議参加にあたって、参加料などは徴収されていない。

3. 中央アジア水資源問題の概要

国際水会議当日について述べる前に、中央アジアの水資源問題について概説する。

中央アジアでは現在、水資源問題が各国の内政上、および地域内の国家間関係上でも、大きな課題となっている。地域内を流れる二大河川、アム川とシル川からなるアラル海流域地域の主に下流域に位置し、アラル海の縮小問題を抱えるウズベキスタンの場合、旧ソ連崩壊に伴う経済問題からくる農村レベルでの灌漑設備の劣化、アラル海周辺地域における水質や土壌の汚染、およびそれによる健康被害などが問題となっている。国家間関係の問題としては、河川の上流国と下流国間の、上流国が推進するダム建設に対する下流国からの反発といった、水量をめぐる対立が挙げられる。特に近年中央アジアでは、水資源問題が安全保障上の懸念

事項として注目を浴びている。

特に注目されているのが、ウズベキスタンとタジキスタンの間の、ログンダムをめぐる対立である。このダムは旧ソ連時代に設計されたものの、その後ソ連崩壊に伴い、資金難のため建設が中止されていた。しかしその後、米ロなどの大国も参与してのアフガニスタンを通した電力供給網構想が浮上したことなどにより、外国からの投資を得て建設が再開されている。完成すれば、同じくタジキスタン国内にある、現在世界一の堤防の高さを誇るヌレクダム（300 メートル）を超える巨大ダムになると予想される。

ウズベキスタンにとっては、国内の重要な産業である綿花農業を維持するためには、安定した灌漑用水の供給が必要である。一方のタジキスタンは旧ソ連最貧国とされ、国内総生産のおよそ半分をロシアなどへの出稼ぎ労働者に頼っている。筆者が今回タジキスタンを訪れ、ドシャンベ市内を見学した時、両替商が扱う通貨の多様さに驚かされた。主要通貨に加え、ロシアのルーブルはもちろん、サウジアラビアやアラブ首長国連邦、イラン、そして両替商によってはアフガニスタンの通貨も扱っていた。ドシャンベ駅の掲示板には、ロシアへ出稼ぎする際の必要書類の記入例が掲示されており、駅の構内には、タジキスタン国内の主要都市からモスクワへと向かう鉄道ルートの一覧が大きく掲示されていた。そのような経済状況の中で、水力発電はタジキスタンにとって極めて重要なエネルギー源であるといえる。

もともとウズベキスタンとタジキスタンの二国間関係は、お互いに「反体制派をかくまっている（または擁護している）」という相互不信や国境問題といった安全保障上の懸念もあり、良好ではない。このログンダムをめぐる対立についても、ダム建設の資材輸送のための鉄道路をウズベキスタンが封鎖する（線路がウズベキスタン領内を通過する）までにエスカレートしている。近年ではイスラム・カリモフ、ウズベキスタン大統領が「将来中央アジアで水資源をめぐる戦争が発生するかもしれない」と発言するなど、緊張状態が続いている。

4. 8 月 18 日、タジキスタン到着

ドシャンベ到着は 8 月 18 日の朝 10 時だった。エアアスタナ機の乗降扉から外を見下ろすと、国際水会議の HP で見たロゴマークのボードが目に留まった。それを掲げたスーツ姿の女性が、降機する乗客に「Water Conference?」と盛んに訊いており、国際水会議の参加者のための出迎えのようであった。そうして呼び止められた、国際水会議の参加者と思われる数多くの外国人乗客が、空港バスではなく、事務局が用意した、同じく国際水会議のロゴが車体に印刷されたバスに乗り込んで、入国審査場とは全く別方向へ走り去っていった。筆者は宿泊施設申請の一件もあり、公式の派遣団員でもないので、そのバスには乗らず、通常通りの入国審査を受けた。なお、荷物受取のターンテーブルの前でも、盛んにスーツ姿の男たち

に、「Water Conference?」と訊かれた。

23 日の出国まで滞在するドシャンベのアパートは、友人を通じて確保した。ドシャンベ市内に出ると、道路の上の垂れ幕や看板、ビルの壁面など、様々なところに「Water. source of life」「Вода. Источник жизни」「Об. Манбаи ҳаёт」というスローガンが掲げられていた。ネットカフェでメールチェックをしていると、会議事務局からウェルカムノート（英語およびロシア語）が届いており、公式派遣団に対する、空港でのラウンジ利用、ホテルから空港と国際水会議の会場までのシャトルバスの運行についての説明があった。

会場は、ドシャンベ市内中心部から目抜き通りのルーダキー通り沿いに、イスマイール・サーマーニ公園と、世界一高い（165 メートル）国旗掲揚塔を左手に見上げつつ北上し、ルーダキー通りの右手、医科大学から通りを挟んでななめ向かいに位置する、大統領別邸（ダーチャ）である。入り口でパスポートを提示し、受付係が名簿をチェックして、ネームタグと、プログラムその他一式が入った、これも国際水会議のロゴが入った袋を渡された。この袋がその後、筆者を助けてくれることになるとは、この時は思いもよらなかった。

写真 1．水会議の資料一式が入った手提げ袋
コーヒーブレークにて

この時もらった記念品の中にはボールペンが二本あり、一本には「High-level International Conference on water cooperation」、もう一本には「Tajikistan is a water country」と印字してあった。このボールペンはいずれも書き心地良好で、ウズベキスタン留学中に現地の文房具の質に苦労した筆者は、「さすがに国の威信をかけているのだな」と感心して、帰国後も使用していたのだが、ある日ふとペンの芯を確かめてみたら、芯には「南昌大班文具有限公司」と印字してあった。

5. 8 月 20-21 日、国際水会議パネル参加

この国際水会議のプログラムは、HP にもあるが、以下の通りである。

初日（8 月 20 日）

9:00-10;30　開会式

10:30-10:40　写真撮影

10:40-11:00　コーヒーブレークおよびネットワークチェック

11:00-13:00　第一回ハイレベルパネルセッション
13:00-14:30　昼食休憩
14:30-16:30　ハイレベルパネル
パネル 1「人間開発のための水協力」
パネル 2「経済的便益のための水協力」
パネル 3「生態系のための水協力」
パネル 4「国境を越えた水協力」
16:30-17:00　コーヒーブレークおよびネットワークチェック
17:00-18:30　特別専門イベント

二日目（8 月 21 日）
9:00-10:30　特別専門イベント
10:30-11:00　コーヒーブレークおよびネットワークチェック
11:00-13:00　ハイレベルパネル
パネル 5「水協力とジェンダー」
パネル 6「水協力と人材育成」
パネル 7「水協力とセクター間のシナジー」
パネル 8「水協力のための誘因と触媒」[1]
13:00-14:30　昼食休憩
14:30-16:30　第二回ハイレベル全体会合
16:30-17:00　コーヒーブレークおよびネットワークチェック
17:00-18:00　閉会式

写真 2.　水会議会場、１階の大階段前

全体としては、分科会のような「パネル」がプログラムの大部分を占めている。これらのパネルでは、中央アジアや旧ソ連圏だけでなく、世界各地から討論者が参加していた。研究者もいたが多い印象は受けず、むしろ国際機関や援助ドナー、政府機関で水資源問題に関わる実務者が多いようであり、学術的な内容よりも、実際に中央アジアで行われている、水資源に関する国際援助活動についての紹介、およびディスカッションが大部分を占めているよ

[1] 以上、ハイレベルパネルの名称の和訳については、日本水フォーラム HP の同会議参加報告を参考とした。

うに思われた。

会場には数多くのブースが設置されており、国際機関のブースでは、中央アジアでの水資源管理に関する援助活動についての紹介が行われていた。エネルギー・産業省、農業省といったタジキスタン政府関係のブースも多数設置されており、特にタジキスタンの水力発電についてのダムのジオラマつきのブースは、メーンの会議場から出てすぐ目の前にあり、数あるブースの中でも特に人目に付きやすい場所に設置してあった。

写真 3.　タジキスタン国内の水力発電に関するブース

これらのブース群は、外国からの投資を呼び込むことを狙っているように感じられた。タジキスタン政府関係、国際機関関係以外では、ダムの建設や水力発電所の稼働に必要な機械についての展示が多かった。エネルギー・産業省のブースでは、発電量について詳細な説明がなされており、タジキスタン国内にある水力発電所の仕様が書かれた本を、ブースを訪れた参加者に無料で配布していた。

筆者は、初日はパネル 4「国境を越えた水協力」、二日目はパネル 6「水協力と人材育成」を聴講した。大統領別邸の敷地内には複数の棟があり、パネルを複数聴講する際には、建物を移動し、別邸の庭園を横切って移動しなければならない。庭園内はヤシの木などが植樹され、噴水も数多く設置されており、門の外の暑いドシャンベ市内とは別世界のようであった。

初日の「国境を越えた水協力」では、中央アジア以外の旧ソ連諸国やアフリカ、ヨーロッパといった様々な国から、各国で水資源管理にあたる政府高官が参加していた。このパネルの参加者の間では、「越境河川は、その管理を通じて、国家間協力の枠組みの核となりうる」、「自国の領域内にある資源に対して独立国家は主権を有しており、越境河川をめぐっては深刻な対立に至る危険性がある」という意見が対立し、越境河川の管理と国家主権のバランスをとるのがいかに難しいか、政策立案者による議論から再認識させられた。

写真 4.　パネル「国境を越えた水協力」

二日目の「水協力と人材育成」では、小規模貯水池の効率化や農民の能力強化など、コミュニティーレベルに着目した取り組みが紹介された。また、スイス人研究者が NGO の活動

に着目した研究発表を行った後の、質疑応答の時間に、中央アジア人の参加者から、「あなたの考えは西欧的な自立した存在としての市民像を前提としているが、そのような市民は中央アジアに存在するのか」という指摘がなされた。

閉会式は、開会式と同じ会場で行われた。会場前方の檀上には、中心にエモラリ・ラフモン、タジキスタン大統領が座り、タジキスタンと同じ河川上流国であるクルグズスタンのジャントロ・サティバルディエフ首相も列席した。また開会式、閉会式、いずれにおいても、アキル・アキロフ、タジキスタン首相がスピーチを行ったが、この首相は、2010 年にウズベキスタン首相が、タジキスタン政府に対してログンダム建設に対する抗議声明を出した時、「親愛なるアキル」と、抗議文のタイトルの中で名指しした人物である。

なお、日本からは、国土交通省の室長が出席していた。話を聞くと、外務省はぎりぎりまで会議参加を検討していたが、結局外交関係者の参加は見送られた、とのことであった。

6. 8 月 22 日、エクスカーションプログラム――ヌレクダム見学ツアー――

22 日には、希望者を対象にエクスカーションがプログラムに組み込まれていた。行き先としては観光地であるドシャンベ市郊外のヒサール要塞（Гиссарская крепость）などから選ぶことができた。筆者はその中から、世界で一番堤防が高いヌレクダムを見学するツアーを選んだ。

写真 5.　ヌレクダムにて、取材を受ける参加者
（以上、筆者撮影）

当日朝、集合場所の、公式派遣団の宿舎となっているポイタフトホテル前から各自ワゴン車に分乗し、警察の警備車両が車列の前後を挟んで、ヌレクダムに向かった。私が乗ったワゴン車に同乗していたのはマレーシアとブータンの外交官であった。道中、車列が交差点を通過する際には、警察が道路を封鎖して横断しようとするする車や歩行者を止める待遇だった。

ヌレクダムには、ドシャンベ市内から 1 時間半程度で到着した。我々参加者は、水力発電の施設も見学させてもらった。管制塔のような建物の中にはソ連時代からこのダムの管理に携わった人物の肖像写真が飾ってあった。ダムの中にある水力発電の設備の中には旧ソ連の地図が掲げてあり、ヌレクダムから放射線状に、ソ連各地に電力が供給されている様子を表していた。その地図の横には、「ソ連の諸民族の友情による労働のリレーの賜物である。それにより、当初の予定より 15 か月も早く、ヌレクダムを全力稼働させることができた」と、

ロシア語とタジク語で書いてあった。

ドシャンベ市内に戻る前に、ヌレクダムの貯水池のほとりにある東屋のまわりで、プロフ（ピラフ）や果物、トマトと黒パン、そしてウオッカなどの飲み物がテーブルに並ぶ昼食会が催された。自分のグラスが空になったのでウオッカを探したが、あれだけあったボトルが減っている。見ると、東屋が内側からカーテンで中が見えないようにされていた。隙間から中を覗くと、一部の高官がウオッカをテーブルの真ん中に並べて、自分たちだけで宴会を開いていた。

7. 出国——ドシャンベ空港にて

帰国はエクスカーションの翌日、23 日であった。ほかの公式派遣団の団員はホテルから空港まで送迎がつくが、筆者は来た時と同じように、アパートの大家に空港まで車で送ってもらった。チェックインと税関申告を済ませた後の荷物検査の際に、職員の一人が荷物を開けるように言ってきた。なんとなくいやな予感がした。これまで中央アジアの空港で、空港職員にわいろをせびられてきたときの雰囲気に似ていたためだ。とりあえず指示に従おうと荷物を開けると、職員が国際水会議のロゴが入った袋に目をとめた。「High-level International…」と、途中まで読んだところで、その職員はあわてて荷物を筆者に返し、「失礼しました」とでもいうように筆者に向かって直立して敬礼をした。

参加を終えての所感——おわりにかえて——

今回のタジキスタン滞在において、到着したその日から帰国の日までの 5 日間、国際水会議のドシャンベ市内における存在感を感じさせられた。筆者がタジキスタンを訪れるのはこれが初めてであったが、これまで中央アジアの空港で、出国審査の際に 3 回も職員にわいろ目的の言いがかりをつけられてきた筆者にとって、ドシャンベ空港での職員の対応は特に印象に残るものであった。

国際水会議の会場では、「Tajikistan is a water country」として、国際社会にタジキスタンをアピールしようとする、タジキスタンの強い意志を感じた。ダム建設という大規模なインフラ整備とそれに対する投資、というレベルから、農村開発や、水資源管理の改善を通じた女性の地位向上というジェンダー問題、など、さまざまなレベルの議論を通じて、タジキスタンと水資源問題をつなげようとする意図が見えたように思えた。

タジキスタンでは現在、ダム建設や水力発電、それによるアフガニスタンを巻き込んだ電力輸送網など、ダイナミックな投資も必要とされているが、一方で、農村レベルの灌漑イン

フラの整備や共同体レベルの水資源管理など、より草の根のレベルで援助が必要とされている分野も多い。二日目のパネルで、スイス人研究者の発表に対する、中央アジア人の参加者からの「あなたのアイデアは西欧的な自立した存在としての市民を前提としているが、そのような市民は中央アジアに存在するのか」という質問は、「人間の安全保障」を重視する日本の国際援助活動が、中央アジアの水資源問題に対して、どのようなアプローチが可能か、示唆を含んでいるように思われた。

参考文献・ウェブサイト

稲垣文昭　2012「電力をめぐる中央アジアの国際関係―ロシア、アフガニスタンと水資源対立の相互作用―」『海外事情』60(9)、61–79 頁。

ティムール・ダダバエフ　2008「中央アジア地域における水管理政策と諸国間関係：現状課題と展望」『地域研究』(29)、23–40 頁。

Ботатурова, А. Д. 2011. *Международные отношения в Центральной Азии, события и документы*. Москва, Аспект Пресс.

国際水会議 HP: http://www.hlicwc.org/, 閲覧日：2014 年 1 月 6 日。

日本水フォーラム HP（同会議参加報告）: http://www.waterforum.jp/jp/what_we_do/pages/policy_recommendations/APWF/2013_dushanbe/index.php, 閲覧日：2014 年 5 月 13 日。

（筑波大学大学院博士後期課程）